同和問題シリーズ 341

いのち・愛・人権

部落解放の魂を太鼓に込めて

気高発、人の世に熱あれ、子どもたちに光あれ!!

「ドンドコドン、ドドーンドン」…。太鼓の響きと演奏者の迫力。
昨年８月の「第32回部落解放鳥取市研究集会」の全体会で
和太鼓を演奏した気高町の「輝夏太鼓（ひかりなつ）」を紹介します。

子どもたちの輝く未来を

「輝夏太鼓」は気高町夏ヶ谷を拠点として、今から約８年前に結成された和太鼓の演奏集団で、メンバーは、夏ヶ谷の小・中学生の保護者会の有志が中心となっています。「輝夏太鼓」という名称は「子どもたちの未来が、部落差別のない光り輝くよき未来であってほしい」という願いと、夏ヶ谷の頭文字をあわせてつくったものです。

和太鼓の演奏を通じて仲間づくりを

本格的に始めるきっかけとなったのは、１９９８年10月に開催された「気高町同和問題研究集会」に招いた、大阪の和太鼓集団「怒（いかり）」の演奏に触れたことでした。若い打ち手たちのしなやかで力強いバチさばき、演奏中も互いの存在を大切にし合う姿を目の当たりにして「私たちもあんなふうに打ってみたい」と感動したのです。

翌月「輝夏太鼓」のメンバーは「怒」の拠点である大阪浪速の練習会場に出向き、早速、バチの握り方や基礎練習を初めとした技術指導を受けましたが「最初はドキドキ。譜面も読めないし、まったくついていけない。私たちにできるだろうか」と不安に。しかし、彼らに「バチを振り下ろせば音が鳴る。自分たちの思いを音にするだけだから簡単だよ」と声を掛けられながら、太鼓に親しんでいきました。

浪速は和太鼓のまちとして知られています。和太鼓を誰がどのようにして作っているのかを知りたくて、実際に和太鼓店へも行ってみました。店頭に並べてある締太鼓や大太鼓などが「音を出して欲しい」と訴えているようでした。

普段は見ることのない太鼓の製作現場にも入らせていただき「打ち手には拍手が送られるけど、太鼓をつくる職人には差別の眼差しが向けられてきた」と語る職人の言葉に、差別の厳しい現実を知らされたようでした。「僕らは太鼓を一生懸命作っています。いい音を出してください」との熱い思いに触れ、太鼓の見方も大きく変わりました。

それからは、仲間が集まれば太鼓の話題でもちきり。家事をしながら、知らず知らずのうちに太鼓のリズムをとるようになり、太鼓が生活の一部になってきました。

なかなか上達しない中で、イライラしたり辞めたくなったりと、心揺れる時期もありました。そんなとき「太鼓は自分だけが音を出すんじゃダメ。相手の音も聞かないと曲にはならない」とアドバイスをくれた「怒」のことを思い出しました。また、「太鼓を通じて人間として成長してほしい」という太鼓職人のひと言も、私たちが太鼓に集まる後押しとなりました。

活動の輪を少しずつ広げて

活動の場が広がる中で、城北地区の和太鼓指導に1年半関わり、城北地区の敬老会や住民との交流会でも演奏を披露しました。このとき、小学生から70歳代までのメンバーが打ち出す音に送られた大きな拍手と「太鼓を聞くのがいちばん楽しみだ」と言う聴衆の言葉が印象的でした。

「城北地区で太鼓文化をつくりたい」という願いに応えたのが始まりだったのですが、城北太鼓と地区の人々とのつながりや、和太鼓に向き合う打ち手の姿勢を見ながら、指導をすることで初心に返ることができ、自分たちの集団を見直すことにもなりました。

■問い合わせ先
市役所本庁舎人権推進課
TEL（0857）20-3224